



『修茂寄合』覚書：連歌寄合集の背景

著者	西田 正宏
内容記述	金子務教授・片倉穰教授停年退官記念号
引用	人文学論集. 1997, 15, p.115-126
URL	http://doi.org/10.24729/00004587

『修茂寄合』 覚書

— 連歌寄合集の背景 —

西田正宏

はじめに

連歌の寄合集が、ある時代の文学の享受を考えるうえで、すこぶる有効であることは、今更述べるまでもない。しかし、例えば、『連珠合璧集』（『連歌論集一』《中世の文学》・三弥井書店刊）の頭注のごとき形で、ある詞がある詞の寄合（付合）となっている、

その理由を解き明かす作業が、十分になされてきたとは言いがたい。連歌作品を読み解く場合には、付合が寄合書に確認されれば、それでこと足りるからであらう。もちろん、付合の中には、特に注釈を施すまでもなく、現代のわれわれにも十分に理解の届くものもある。「梅」に「うぐひす」などはその典型であらうか。また、すでに寄合書の中に典故となった和歌が挙げられていたり、詞に典故が注記

されていたりして、その付合の根拠が示されている場合もある。けれども、そのような注記があるものはごく一部に限られており、背景となる和歌なり、あるいは物語なりが提示されなければ、その付合の必然性が理解できないものがほとんどではなからうか。『連珠合璧集』の頭注のごとき作業は、やはり、必要なのである。

『人文学論集』第十三・十四集と、二回にわたって『修茂寄合（三輪本）』を紹介し、今回、そのまとめとして、寄合索引を作成した。このことを契機に、先に述べた、ある詞がある詞の付合となる理由、言わばその背景について、この『修茂寄合』に関わって考えたい。¹⁾このような試みを通して、寄合語の文学史的背景をいささかでも解き明かすことができればと思う。

一、〈すみれ〉の寄合をめぐって

は
 〈すみれ〉の寄合に、『修茂寄合』（「三輪本」と「京大本」）

あれたるやと おの つほ よこの いわたのおの はこね山
 ふしみ

を挙げる。末尾に典故として示された二首の和歌、

こよひねてつみて帰らんすみれさくおのゝしはふ露ふかくとも

（京大本、おのゝしはふは）

あさちふやあれたるやとのつほすみれたれ紫の色にそむらん
 がともに『堀河百首』（それぞれ国信・二四三と顕仲・二五〇）に
 見え、この二首によって、〈すみれ〉の寄合のうち「あれたるやと」
 「おの」「つほ」については理解がとどく。しかし、この二首では、
 寄合語のすべてを覆い切れない。それ以外の寄合語について、掲出
 順に考えることにしたい。

「よこの」については、例えば『山家集』³⁾に
 すみれさくよこのつばなさきぬればおもひおもひに人かよふ
 なり
 （一〇一五）

とあることが、一つの典故として指摘できようか。

「いわたのおの」「はこね山」「ふしみ」の三つについては、そ

れぞれ『堀河百首』の「葦菜」題に次のように見える。³⁾

きゝすなくいわたのをのゝつほすみれしめさすはかりなりにけ
 るかな
 （顕季・二四五）

はこね山うすむらさきのつほすみれふたしほみしほたれかそめ
 けん
 （匡房・二四二）

くさまくらたひねをしつゝ人そつむふしみのゝへにおふるすみ
 れは
 （師時・二四九）

「よこの」以外のすべての寄合語が『堀河百首』を典故としている
 ことから、〈すみれ〉の寄合に『堀河百首』が大きく影響を及ぼし
 ていることが知られよう。

二、〈わかな〉の寄合をめぐって

〈わかな〉について、『修茂寄合』（「三輪本」）は、

ゆきま さわへ あれ田 きみかため かすかの いく田 海

さわ おの とふひの よしの あしたのはら

を挙げる。典故を示すべく挙げられた和歌は、

君がため春ののいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ
 （古今・二二）

の一首だけで、これでは「きみかため」以外の寄合語については、
 説明がつかない。ところが、『堀河百首』の「若菜」題のところを

繙くと、

たひ人の道のさまたけにつむものはいくたのをのゝわかななり

けり (師頼・六八)

みそれふるを野のあれ田にゑく摘は誰かはきせん昔の小笠を

(顕仲・七〇)

かすかのゝゆきまのさはにそてたれて君かためにとねせりをそ
つむ (仲実・七二)

と見え、ほとんどの寄合がこの『堀河百首』の和歌の範囲に収ま
てしまう。『堀河百首』には見出せない末尾の三つ、「とふひの」

「よしの」「あしたのはら」のうち、「よしの」には「しういしう
にもよめり」、「あしたのはら」には「こしういしうにもよめり」
と細字で注記され、典拠が示されている。それぞれの詞の典拠となっ
たと思われる和歌を示せば、次の通り。

とふひの

うづゑつきつままほしきはたまさかに君がとふひのわかななり

けり (後拾遺・三二・伊勢大輔)

よしの

みよしのもわかなつむらむわぎもこがひばらかすみて日かずへ

ぬれば (拾遺・四〇七・もとすけ)

あしたのはら

あすからはわかなつまむとかたをかの朝の原はけふぞやくめる

(拾遺・一八・人麿)

右に示した通り、「あしたのはら」については注記されていた『後
拾遺集』には見出せず『拾遺集』に見える。

以上は、「三輪本」に限って考察を進めてきた。末尾の三つの寄
合はともかく、全体として、寄合語の背景に『堀河百首』が大きく
影響を与えていることが認められよう。

この部分、「太田本」は欠いているので比べることができないが、
「京大本」に目を向けると、「三輪本」で典拠を明確に指摘できな
かった「海さは」と『堀河百首』以外のものに拠っていた末尾三つ
の寄合を欠いている。そして「三輪本」にはない「浅沢小野」が加
わっている。「わかな」と「浅沢小野」が一首のうちに詠み込まれ
た例は、今のところ見出せないが、「せり」と結びつく例はある。

例えば、

おもひかねあさはをのにせりつみし袖のくちゆくほどを見せ

ばや (式子内親王集・二六九四五)

などである。先に挙げた『堀河百首』七二番の歌のように、この
「浅沢小野」との寄合には、「わかな」を「せり」とする理解がは
たらいていると推察される。△わかな▽については、「京大本」の
方が「三輪本」よりも『堀河百首』に収まる範囲で寄合語が集めら

れていると言えよう。

なお、「三輪本」の〈わかかな〉の寄合に関して、「よしの」と「あしたのはら」が見えるということを考慮するならば、次に示す『和歌無底抄』（日本歌学大系第四巻による）との関連も注目されよう。

此題はみよしの、朝の原、あらを田、野へ、沢辺などにはよむべし。春日野にもよめ、うらわかきよしをよみて、はねにもたまらぬよしを云うべし。いくばくの家づともなしなど云ふ心もさきにおなじ。生田のをのにつませては、旅人の道のさまたげのよしを云ふべし。えぐもわかなのうちによむべし。えぐと云ふはせりなり。芹はとことにはあれども、春くれば若菜のうちによむべし。（以下略）

もとより、『和歌無底抄』のこの部分は、全体に『堀河百首』と深く関わりのあることが指摘されており、『修茂寄合』との関係も即断することは許されない。今は、その事実を指摘するにとどめ、後考を期したい。

三、『修茂寄合』と『堀河百首』

一、二と、〈すみれ〉と〈わかかな〉の寄合について個別に検証してきた。それらは、ともに『堀河百首』を一つの核として、寄合語が集められている顕著な例であった。この点について、さらに考察

を深めたい。

『堀河百首』が『修茂寄合』全体にどの程度の影響を及ぼしているのかを確認するために、最も成立時の面影を残していると考えられる「三輪本」の四季の部について、『修茂寄合』の見出しの項目（『連珠合璧集』でいうところの「……トアラバ」に当たる部分）と『堀河百首』の題とを対照させると次の表のようになる。「三輪本」の項目を挙げ、『堀河百首』にあれば、○をつける。また、全く同じではない場合には、『堀河百首』の題も挙げておくこととする（△は、『永久百首』の題との関わりを示す。このこと後述）。

三輪本の項目	堀河百首の題	三輪本の項目	堀河百首の題
〈春〉		〈夏〉	
わかかな	○	時鳥	○
うくひす	○	卯の花	○
柳	○	かきつばた	○
すみれ	○	たちはな	○
ふち	○	あやめ	○
	○	ほたる	○
山吹	○	なてしこ	○
かわつ	△	夕かほ	△
きゝす	△		

三輪本の項目	堀河百首の題	三輪本の項目	堀河百首の題
あふき	△	かり	○
みそき	〔荒和敷〕○	うつら	
〈秋〉		きりくす	△
七夕	○	松むし	△
日くらし		鈴虫	△
ひさき		もみち	○
おき	○	きく	○
はき	○	きぬた	〔擽衣〕○
おみなへし	○	〈冬〉	
朝かほ	○	しくれ	○
すゝき	○	あられ	○
お花	〔薄〕○	あしろ	○
くす	△	をし	△
かや	〔苳萱〕○	かも	
田		千鳥	○
しか	○		

一見して、気づく点が二つある。一つは、『堀河百首』の題が、

「三輪本」に与えた影響の大きさである。それぞれの寄合台語までが、総べてに亘って『堀河百首』の影響を指摘できるわけでは、ない。しかし、それぞれの寄合語の中の、必ずいくつかには、『堀河百首』との関わりを見て取れる。もう一点は、『堀河百首』の題以外の項目が、ひとかたまりにまとまって存在することであり、そのことから『堀河百首』の題を中心に据えながら、増補する形で、「三輪本」が編纂されていることが窺われるのである。もちろん、その増補が原本成立以後のことであるのか、原本の編纂自体がそのような成立過程を示しているのかは即断できない。しかし、今ここで注目しておきたいのは、基盤を『堀河百首』に据えていることと、何か別のものが増補しているらしいということである。

基盤が、『堀河百首』であることは、先に示した表の通りである。ならば、それ以外の増補資料は何だったのであろうか。

例えば、〈かわつ〉の項目を例にその点について考えることにしたい。「三輪本」は、〈かわつ〉の寄合に次の語を挙げる。

田 雨 うた ふるる 山ふき 神なひ河 いて ほり江 六
田のよと さやまの池 こやの池 すみ吉

そしてその典拠となる和歌として次の三首を挙げる。

河出なく神なひ河にかけみえて今や咲らん山ふきの花

足引の山吹の花咲にけりいてのかはつは今やなくらん

高せ舟のほるほり江の水をあさみ草かくれにてかはつなく也
はじめの二首は、それぞれ『新古今集』一六一番、一六二番の歌で
ある。残る一首は、『永久百首』（顕仲・一二〇）に見出せる。こ
こで注目しておきたいのは、この『永久百首』の歌が挙げられてい
るという点である。実は「蛙」題は『堀河百首』には見えず、『永
久百首』に見出せる題である。この点を考慮して、なおへかはつ
の寄合に『永久百首』との関わりを窺うと、

さやまの池

春ふかみさ山の池のねぬなはのくるしげもなくかはづなくなり

（仲実・一二二）

こやの池

いかばかりいぶせかるらんこやの池の水草のもとにすだく蛙は

（兼昌・一二四）

と、さらに二つの寄合語の典拠を追加できる。

次のへきゝすも、また『永久百首』の題であり、引用された和

歌のうち、

みかりするかたのゝはらをけさゆけはひとつまつねにきゝす鳴

也

は『永久百首』の和歌（仲実・一〇七）である。

先の表で、『堀河百首』の題と関わらなかったものうち、へか

わつゝへきゝすへなてしこへあふきへくすへきりくす
へ松むしへ鈴虫へをしへは『永久百首』にその題を見出せるの
である（表中△で示した）。周知のごとく、『永久百首』は『堀河
百首』と一連のものとみなされ、合わせて『堀河両度百首』と呼ば
れることもある。四季の部に限ってではあるけれども、『修茂寄合』
成立の背景には、この『堀河両度百首』が深く関わっていると認め
られるのではないだろうか？

以上、『修茂寄合』が、『堀河両度百首』、とりわけ『堀河百首』
と深い関わりがあることを見定めてきた。寄合集の集大成と言われ
る『連珠合璧集』よりも成立が早く、それに匹敵するくらい寄合語
（見出し語ではない）の数も豊富な『修茂寄合』に、これほど顕著
な『堀河百首』の影響を窺うことができることの意味は、小さくは
ない。このことは、『修茂寄合』だけの問題にとどまらず、連歌の
寄合の最も基盤となることに『堀河百首』があることを示唆して
いよう。

こうした事情は、寄合集として最も完備したものの一つ『連珠合
璧集』にも投影しているごとくである。先に取りあげたへすみれ
の寄合を例に考えると、『連珠合璧集』はその寄合に

紫摘 あれたる宿 小野のしばふ 春の形見 野をなつかし

み 一夜

を挙げる。「あれたる宿」について、頭注では、『新古今集』能因の歌

いその神ふりにし人を尋ねればあれたるやどにすみれつみけり

(雑中・一六八四)

を指摘する。『修茂寄合』の細字注に「しんこきんしふにもよめり」とあるのは、この歌を指してのことであろう。この『連珠合璧集』の頭注は、それはそれで、誤りとはいえない。が、次の「小野のしばふ」は、特に注されていないけれども、やはり、先に挙げた「堀河百首」二四三番に基づいていると考えられる。ならば「あれたる宿」もまた「堀河百首」二五〇番に拠ったと見てよいのではなからうか。この『堀河百首』の二首の歌を挙げることで、「紫」も「摘」もその典拠を示したことになる。

また「春の形見」について、『連珠合璧集』頭注は、『夫木和歌抄』の次の定家詠をその典拠として指摘する。

おもふどち春のかたみに董つむ野原のまどぬあめぞそぼふる

ただし〈すみれ〉と「春の形見」が付く例は、『千載集』(源頭国・

一一〇)にも

道とほみいる野の原のつぼすみれ春のかたみにつみてかへらんと認められる。それはそれとして、『堀河百首』にも

わきもこか花のたもとをかたみにてつめるすみれそこゝること

なる

(俊頼・二四八)

とあり、関連が窺われる。したがって、〈すみれ〉については、『連珠合璧集』も『堀河百首』を基盤にしていると考えられるのである。

もとより、このような寄合集は、実用書という面が大きいので、時代や享受者の好みが敏感に反映していよう。だから、項目は『堀河百首』を基盤としていても、実際の寄合には、それ以外のものも多く含まれている。『修茂寄合』に限っても、「三輪本」に比べ、「太田本」は項目も寄合語もかなり増補されているので、『堀河百首』との関係はもっと薄くなる。個々別々の寄合集の背景を考えるためには、このような伝本の問題も含めた、より慎重な検討が必要であろう。

その核心をなすもの、増幅をはかれたもの、しかし、少なくともその形成の根底に『堀河百首』が存在することは、ゆるがないと思う。

四、『修茂寄合』と注釈

最後に『堀河両度百首』に寄合語が関わらないものについて、少し検討しておきたい。

例えば、先に『永久百首』との関係について検証するための例と

した（かはつ）の寄合の中に、「三輪本」は、「住吉」を挙げてい
る。「京大本」、「太田本」、ともにこの語はなく、「三輪本」独
自の寄合語である。もちろん『永久百首』の「蛙」題の中にも「住
吉」を詠み込んだ和歌はない。『平安和歌歌枕地名索引』（片桐洋
一監修・ひめまつ会の編〈大学堂書店刊〉）を手がかりに、「住吉」
の側から「かはつ」との関わりを探ってみても、この二語を詠み込
んだ和歌は見出せない。和歌の伝統には、この二語を結びつける契
機はないと見ておいて、ひとまずは差し支えないだろう。

連歌の寄合の背景が、いつも和歌にだけ求められるものでないこ
とは、いうまでもない。実際、今問題としている（かはつ）
の寄合に「歌」が挙げられているのは、すでに『修茂寄合』
（すべての本に共通）がこの項目の末尾に引用するように、『古今
集』の仮名序の一節

花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、
いづれか、歌を詠まざりける。

に拠っているとみて、まず動かない。

それでは、「住吉」には、どのような背景が考えられるのであろ
うか。結論を先取りしていえば、この「住吉」もまた『古今集』の
仮名序が関係していると思われる。もちろん「仮名序」そのもので
はない。『古今集』の仮名序の注釈が、その背景にあると考えられ

るのである。

先に引いた『古今集』の仮名序の一節を注釈して、実際に鶯が歌
を詠み、蛙も歌を詠んだとするのは、例えば、『三流抄（古今和歌
集序聞書〈能基注〉）』（片桐洋一著『中世古今集注釈書解題二』
赤尾照文堂刊）に

蛙ノヨムト云事、同ク日本紀ニ云ク、老岐守紀ノ良貞、忘草ヲ
尋テ住吉ノ浜ニ行タリケルニ美女ニアヘリ。後会ヲ契ルニ女ノ
云ク、「吾ノ恋シク思ハン時ハ、此浜ヘマシマセ」ト云。後ニ
尋テ行タルニ女ナシ。彼浜ニ蛙出来テ、居タル前ヲ這ヒ通ル。
其足ノ跡ヲミレバ文字也。是ヲヨミテ見レバ哥ナリ。

住吉ノ浜ノミルメモ忘ネバ仮ニモ人ニ又トハレヌル
此哥ヲ見テ、蛙ノ化シタリケルト思テ還リヌ。万葉ニ此哥、蛙
ノ哥ト入レリ。

とあるのを、早い例として、むしろ『修茂寄合』が成立した時代に
は、常識とでも呼びうるような説であり、遍く知れわたるところで
あったと推察される。例えば、『修茂寄合』と時代の近い『蓮心院
殿説古今集註』⁸⁾（片桐洋一著『中世古今集注釈書解題四』）には、

花になく鶯水にすむかはつのごゑをきけば、鶯の事、一説「は
つ春の朝毎には」の歌、「住吉のみるめし」の歌を引て云とあ
り。当家には用給はず。捨給ふにもあらず（以下略）

と記され、その引用が省略された形であることが、かえって、その説が広く知れわたっていたことをものがたっているよう。

また、連歌の知識を集大成したとされる『和歌集心躰抄抽肝要』(大学堂書店刊・一四五頁)に、

花ニ鳴鶯、水ニ住蛙生キトセ生ル物ノ哥誦、又ハ、無難受人ノ
姿ニ浮出テ、此道ヲ窺、又、人何時カ亦生ヲ受ム、住吉ノ海士
ノ見目モ恥ヤ借ニモ人ノ亦問ムトハ、蛙哥(以下略)

と見え、連歌の世界においても、その説が知れわたっていたことが窺える。これらのことから〈蛙〉の寄合語の一つに「住吉」が挙げられているのは、その背景に『古今集』の注釈世界があると考えて差し支えないだろう。当時の時代状況から考えても、「三輪本」が、〈蛙〉の寄合語の一つに「住吉」を挙げたのは、当然の措置といえる。しかし、ここで注意しておきたいことがある。それは、「住吉」を挙げるのが、「三輪本」だけであるという点である。「京大本」は、この「住吉」だけを欠いているので、あるいは単なる脱落の可能性もあろう。「太田本」は、「住吉」を欠き、「あかたの井戸」が挙げられている(このことについては、後述する)。既に解題で述べたように、この三本間の寄合語の出入りは、典拠とする歌の出入りとも密接に関わっており、全体を通して、『修茂寄合』を享受した者たちの、それぞれの意図を反映したものであると考えら

れた。〈蛙〉の場合、典拠とする歌が「住吉」に関わらないため、即断はできないけれども、「住吉」が意図的に削除された可能性がある。

その点を考えるにあたって、次のことが注目される。寄合のひとつ「哥」を説明するために、末尾に『古今集』の仮名序の一節が引用されていたことは、先に述べた。その冒頭に次の一文が加わっていることに、注意しておきたい。それぞれの本別に示すと、次の通り。

「三輪本」 かはつの哥の事、そのゆへあり。

「京大本」 かはづの歌ぞ、ゆへあり。

「太田本」 蛙に哥を付る事、其故あり。

「三輪本」「京大本」は、ともに「かはづの歌」には、それ相應の「ゆへ」があるのだと読める。つまり、この一文は、今まで述べてきた寄合語「住吉」の背景を示唆するものであると受け取れる。

「京大本」は、寄合語の中から「住吉」は削除したが、その理由を解き明かした部分が残ってしまったと推察される。「太田本」は〈蛙〉に「歌」が付くことに「ゆへ」があるのだと述べている。このあとすぐに『古今集』の仮名序が引かれていることから、「住吉」の削除に対応するように、文辞が改変されたと思われる。さらに「太田本」は、「あかたの井戸」を寄合語に付け加え、その典拠となる

歌として、『後撰集』

宮こ人きてもをらなんかはづなくあがたのよどの山吹の花

(一〇四・橘のきんひらが女)

を挙げている。この点から考えても、やはり「住吉」は意図的に削除されたと見てよいのではないだろうか。また、『宗祇袖下』の寄合を記したところや『連珠合璧集』の〈蛙〉の寄合語に、「住吉」が見えないことも、その傍証の一つとなろう。

ならば、どうして「住吉」は意図的に削除してしまったのであろうか。

そこで心しておきたのは、この蛙が歌を詠んだという説は、古今集注釈史上においては、必ずしも受け容れられてゆく説ではなかった、ということである。例えば、当時の和歌の一大流派であった二条家流では、この説は記されていない（『浄弁注』など）。それを受け継ぐとされる宗祇の『両度聞書』も、全く「蛙の歌」説は無視している。先に挙げた飛鳥井家の注釈である『蓮心院殿説古今集註』では「当家には用給はず。捨給ふにもあらず。」と微妙な立場をとっている。一条兼良の『古今集童蒙抄』（群書類従巻第二百八十七）は、いま挙げた注釈の流れとはやや別の次元で考えるべきであろうが、そこでは、

或抄の釈に、鳥獸のまさしく卅一字をよめる証をひけるは、謬

説なり。用ふべからず。

と、きっぱりと「蛙の歌」説が否定されている。やや時代は下るけれども、やがて二条家流でも、「住吉ノ蛙女ノ義不可用之」（『古今私秘聞』〈ノートルダム清心女子大学古典叢書〉）と、明らかにその説を否定する文辞が記されるようになるのである。

以上の点を考慮すれば、「三輪本」に記されていた「住吉」が、享受されて行く過程で削除されたのも、得心できる。

〈かはづ〉の寄合語としての「住吉」は、ある時代の文学史的背景を如実に反映した詞であったのである。

おわりに

以上、『修茂寄合』の背景に、『堀河百首』が深く関わっていることを中心に検証してきた。

連歌という文芸が、よりどころとした和歌世界の、もっとも基本的なものの一つに『堀河百首』も考えるべきであろう。もちろん、このことは、宗祇をはじめとして連歌師たちによる『堀河百首』の注釈書が存在すること、また、様々な寄合集に『堀河百首』の歌が引用されていること、この二点からも、十分に予測されることではある。連歌が盛んになり、一つの語に多くの寄合語が要求されたとき、題に合わせて、趣向の違う種々の歌が集められている『堀河百

首』が格好のテキストとなったであろうことは、想像に難くない。

むしろ『堀河百首』の寄合語は、次第に「常識」とでも呼びうるようなものになってしまい、『連珠合集』などの寄合集にはことさら記されなくなったのかもしれない。ならば『修茂寄合』（特に「三輪本」）は、寄合集の、もっとも根源的な姿をとどめていると言えるだろう。

本稿では、『修茂寄合』に挙げられた個々の寄合語の背景を考えることで、連歌寄合集の成立の基盤に『堀河百首』が深く関わることを見定めようと努めた。

〈注〉

- (1) 『修茂寄合』の解題は、『人文学論集』第十三集に三輪正胤先生と共同執筆した。そこではもっぱら伝本のことを中心に述べた。本稿は、その解題で意を尽くせなかったところを補う意図もある。
- (2) 『人文学論集』第十四集に掲載した和歌出典一覧で「こよひねて」の歌の出典を『千載集』としたが『堀河百首』の影響を鑑みて『堀河百首』を出典とすべきであった。ここに改めておきたい。なお、同様の理由で18〈金葉一二〉をへ堀河百首五三〇に、96〈金葉一三三〉をへ堀河百首三八五に改めることとする。
- (3) 和歌の引用は、『堀河百首』以外は新編国歌大観による。ただし、詞書は省略した。
- (4) 『堀河百首』の引用は、橋本不美男・滝沢貞夫著『校本堀河御時百首和歌とその研究 本文・研究篇』（笠間書院）による。ただし、底本独自の誤りについては、他本により校訂を加えた場合がある。
- (5) 滝沢貞夫氏「堀河百首と和歌無底抄」（『言語と文芸』七七・昭和四八年二月）
- (6) 『堀河百首』にしか用例が見出せず、顕著に『堀河百首』が典拠とわかるものもあれば、他の歌集にも多く用例が見出され、特定できないものもある。
- (7) 空欄の部分については、それぞれに典拠となる歌が示されており、何か一つのものに絞ることはできない。「三輪本」もまた、原本の面影を最もよく伝えているとはいえず、原本ではなく、増補も考えられる。したがって、この部分も「三輪本」段階での増補とも考えられる。
- (8) 「三輪本」には文明四年の本奥書、「京大本」には長享三年の書写奥書がある。『蓮心院殿古今集註』には「長享三年四月十四日御講尺終也」とある。

(9) 徳江元正氏は「番外謡曲「蛙」考」(『室町芸能史論攷』昭和五九年・三弥井書店刊)の中で、この『古今集』仮名序にまつわる蛙の説話と和歌を博搜され、番外謡曲「蛙」の本説を明らかにされている。この説話と和歌がかなり流布していた状況が窺われる。